

上智大学

2021年度一般選抜（学部学科試験・共通テスト併用型）

学部学科試験サンプル問題

総合人間科学部 心理学科

【学部学科試験名】

心理学のための理解力と思考力を問う試験

【試験時間】 75分

【出題の意図、求める力等】

本学科では、他者に対する温かな関心と人間の尊厳を尊重する姿勢を持ち、次のような素養を持つ学生を求めている。第一は、身の回りで起きていることに対して好奇心を持ち、自ら調べ、学んでいこうとする意欲のある学生、さらに、物事を多角的な視点から柔軟に眺めようとする意欲のある学生である。第二は、先行する多くの文献を臆することなく読み進めることのできる学生、さらに、さまざまな領域の人々と協働的に学ぶことのできる学生である。第三は、物事を論理的かつ客観的に分析し、文章にまとめたり口頭で発表したりすることのできる学生である。本試験は、上記の姿勢や素養のうち、特に、与えられた文書や資料（図表を含む）を的確に読み取り、その内容を論理的かつ客観的に分析し、その結果を文章にまとめたり、与えられた問いに適切に解答したりする力を測ることを意図して出題している。

※サンプル問題の出題形式は例であり、問題数は本試験と異なる場合があります。

11 次の文章を読んで後の問い（問1～問7）に答えなさい。

（ 1 ）

ある特定の動物になる、あるいはその動物の身になったところを想像してみる、ということが文学の世界ではよくあります。漱石の『吾輩は猫である』やカフカの『変身』はその代表的な例です。

これらの作品を読んでいると、このような想像もそれほど突飛な話ではない気がします。その動物になってしまったら、自分の生活はどうなるのか、「どんな感じ」がするのか、想像することは、簡単な気がするでしょう。

しかし、ほんとうにそうでしょうか。精密に検討してみると、このような想像が意外に困難であり、むしろ不可能に近いことがわかってきます。正確に言うと「想像すること」自体は簡単なのですが、①その妥当性を主張することが無意味なのです。

哲学者ネーゲルは、この問題をもっともきちんとして提起した人です。彼はそのタイトルもずばり「コウモリになったらどんなふうか？」という論文で、その不可能さと無意味さを指摘しています。「コウモリの身になったらどんなふうか、その体験事実はコウモリだけに特異的なもののはずである。あまりにも特異的すぎて、それをわれわれ人間が想像できると主張することすら、ほとんど無意味なのだ」と彼は言います。

（ 2 ）

（ ア ） 自分の腕が網状に枝分かれしてその間に膜が張り、空が飛べるようになったら、どんなだろうとか、明け方や夕方の空を飛びながら虫を捕まえられたらとか、一日中洞穴や天井裏に足でつかまって逆さ吊りでいたら、などと想像することは、もちろんできます。目がほとんど見えず、超音波のエコロケーション（反響定位）・システムを使って環境世界を知覚するというのも、ある程度想像することは可能だともいえます。

しかし、そのような想像をしている限り、それは「私がコウモリの身に押し込められたら」という想像でしかありません。飛行機にパイロットが乗り込み操縦するように、コウモリに「私が」乗り込み「操縦する」ことを想像したら、という特異なケースでしかないのです。

そこで体験されるのは、飛行機（コウモリ）は確かに飛んでいるが自分の身体は操縦席に安全ベルトでしばりつけられているという体験です。飛行機は確かに宙返りして一瞬逆さになりますが、その結果、自分の身体も重力の方向に対して一瞬逆さになったという体験でしかない。仮にこの飛行機がエコロケーション・システムで障害物や地表までの距離を測っていたとしても、それを操縦士たる私が知覚するには、あくまでも計器類を見るか聞くかすること、つまりヒトとしての五感に頼るほかはないのです。「私がコウモリの身に押し込められたら」というときに想像されているのは、これに類する内容でしかありません。

しかし、いまここで問うているのは、そういうことではありません。「コウモリがコウモリとして、コウモリの身で体験する世界とはどのようなものか」という問いなのです。その問いに答えようとして想像力を働かす瞬間に、そこには「私」の「ヒト」としての制約が避けがたくはたらいてしまいます。この制約そのものがすでにして、ここで要求されている課題と矛盾します。つまりどうがんばっても、想像されたものは「ヒトの身体」の経験であり、「ヒトの心」の経験でしかないのです。

(3)

まだ納得できないと言われる方のために、もう少しがんばってみましょうか。

つまりヒトとしての「過去」、ヒトとしての「記憶」がじゃまをしているということだろう。それなら、先ほどの「飛行機とパイロット」のような状態でも構わない、強引に (イ) コウモリに「乗り込んで」、コウモリのセンサー (感覚器) を使い、コウモリの翼を使って飛び続けてみてはどうか。そうすればやがて、コウモリとしての「経験」、コウモリとしての「来歴」ができ、コウモリとしての「自我」さえ (もしそんなものがあるとすれば) 芽生えるかもしれない。その分だけコウモリ自身の体験に近いものを体験できるのではないか。

これはかなりいい線を行っている議論だと思います。しかしこれをさらに徹底するには、人間としての感覚能力や記憶をすべて「失う」、あるいは「消し去る」というところまで推し進めないと完璧ではありません。そうでないと、完全にコウモリとしての「来歴」を獲得したことになるのではないのです。

ところがそうなったとすると、そこに存在するのは「私」ではなく、何の変哲もないコウモリが一匹いるだけということになりはしないでしょうか。つまりこの思考実験の前後を比べると、もとは「私」と自ら呼んでいたヒトが一人消え、コウモリが一匹増えただけという話になるのではないのでしょうか。「コウモリになったとしたときの体験をありありと想像できるか」という最初の課題も、どこかで (ウ) してしまうことになるのです。

ただし、人間としての「脳」はまだ残っている、という反論もあるかもしれません。つまり、記憶はなくても、知覚したり思考したりする人間としての「脳」機能がコウモリの身体に残っている以上、その脳を使ってヒトとしての私がコウモリの主観的体験をすることが可能なのではないのでしょうか。

これがまさに議論の核心でもあるのですが、重要な難題が二つあります。

一つ目は、誰でも気づくことですが、これではまたしても不徹底な話になり、ヒトの「来歴」を完全に消してコウモリの来歴を獲得したことにはならないことです (それどころか、来歴の中核をなす「脳」が丸ごと残っていることになります)。

二つ目はもっと常識的で現実的な点ですが、コウモリの身体にヒトの脳をつないでも、うまく作動しないということです。それはそうです。たとえば、右手の親指を動かす運動神経を、コウモリの身体のどこにつないだらよいか、どうつなげばうまく作動するのか、またそれを誰が判断するのか。ヒトとしての身体と知覚経験を持った動物生理学者では、不適格かもしれません。

この二つ目の問題は、生理学や外科手術の進歩によって解決できる技術的な問題のようであり、実はそうではありません。普通の生活をしてきたヒト (コウモリ) における、いま述べたこの「つなぎ」、つまり神経と身体部分との適切な連絡を決めているのは何なのか。やはり「来歴」を外しては考えられないはずで

(4)

種として特有の遺伝的な形質を基盤に、神経発生を経て、感覚情報を処理し身体を制御できるまでに発達した脳。身体を通して環境に働きかけ、その結果得た環境に関する情報を蓄える脳。ところが脳の内部に入り込んで「記憶の座」を探しあてても、それだけではその記憶の「意味」はわからず、環境と身体の経験に照らしてはじめてその意味が (つまり生物学的な機能が) 理解されるという事実。あえてもっと象徴的な言い方をすれば、記憶は身体と環境に遍在し、そして脳の記憶に先立つということ。神経と身体の「つなぎ」を決めているのは、これらの総体です。

つまり最終的にやはり、環境と身体をめぐる脳の来歴が問題となるのです。先ほど「二つの難題」として、

ヒトとしての記憶を持ったままコウモリの身になって経験してみることはできないということと、神経と身体をつなぎを決められないということを挙げました。

しかし、おわかりのとおり、これら二つの問題は結局、「脳の来歴」を外しては考えられないという一点に収斂^{しゅうれん}してくるのです。

もともとネーゲルがコウモリの思考実験を持ち出したのは、哲学上の難問「心身問題」の文脈においてであり、特に「心の体験を身体の生理学的、物理学的過程だけで理解できるか」という問題との関連においてです。科学的説明は本来一人称の「視点」からは自由な客観的な記述でなくてはならない。しかしそうなればなるほど、皮肉なことに、ここで説明しようとしている主観的な（つまり特定の視点からの、特定の身体による）体験の本質からは遠ざかっていく。つまり説明対象の諸特徴のうちで、もっとも説明したい特徴を置き去りにしたことになる。②そういう矛盾を指摘するための直感的で説得力ある例として、ネーゲルは「コウモリ」を選んだのです。

しかし、私たちのここでの関心は、それとは（密接に関連はしているものの）少しちがっています。私たちは、心の体験、特に知覚体験が、身体を抜きにしては語れないこと、いや想像すらできないということを通じて、「脳の来歴」ということばの含蓄を理解したのです。

このコウモリ問題は、脳が連続的で身体が突然変わった場合を想定していますが、「幻肢」の有名な事例もこれと似ています。手足を事故などで切断された患者が、何年たっても、もはや存在しないはずの手（足）をしばしば体感するという現象を「幻肢」といいます。いまだにそこに手足があるように感じる。痛みを感じ、寝るときや衣服を身につけようとするときに邪魔されて不自由を感じる。本当に手足がそこにあるのと似た「生き生きとした」感覚が残り続けるのです。

手や足を切断しただけで、新しい身体のイメージを持つのにこれだけの困難が生じるのですから、ましてや身体が丸ごとコウモリの身体になってしまったら。今度こそ文字通り「想像を絶する」と予測するしかない道理です。種の限界は想像力の限界でもあるのです。

下條信輔『＜意識＞とは何だろうか』

（1999年 講談社）

問1 空欄（ア）に入れるのに最も適当な語を、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

- ① しかし
- ② たとえば
- ③ そして
- ④ すなわち
- ⑤ ゆえに

問2 下線部①「その妥当性を主張することが無意味なのです」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

- ① 動物の身体についての想像力の限界を超えるような感性の可能性を主張しても、それでは論理的には正しくても、感性の問題として十分に肉薄しているとは言えない。
- ② 動物の身体感覚を正確に再現することは、想像するよりも困難なことであり、そこには必ず一定の誤差が生じるため、十分に正確な再現にはならないという限界がある。
- ③ 動物の身になり切ることが仮に可能であっても、それは今ここで問題になっているような意味での人間と動物の差異の考察に適した意味においてであるとは言えない。
- ④ 動物と人間の共通性に着目すること以外の方法では、想像力の限界を超えて、他の存在を成り立たせている認識論的根拠に^{たど}り着くことはできない。
- ⑤ 動物と人間は異なる種に属するため、どのように想像したとしても、種の違いの根源的な差異を乗り越えることはできない。

問3 空欄（イ）に入れるのに最も適当な語を、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

- ① ヒトの来歴をひきずったまま
- ② コウモリの記憶を想像して
- ③ コウモリの自我を予期しつつ
- ④ ヒトとコウモリの混成物として
- ⑤ ヒトの来歴を捨て去って

問4 空欄（ウ）に入れるのに最も適当な語を、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

- ① 解決
- ② 蒸発
- ③ 収束
- ④ 矛盾
- ⑤ 停滞

問5 空欄(1)～(4)に入れる小見出しの組み合わせとして最も適当なものを、次の①～⑦のうちから一つ選びなさい。

ただし、

- a コウモリと飛行機
- b 動物になる体験
- c 記憶を全とっかえできるか?
- d 心を語るのに身体は欠かせないとする。

- ① (1) d (2) a (3) c (4) b
- ② (1) b (2) a (3) c (4) d
- ③ (1) c (2) d (3) b (4) a
- ④ (1) a (2) b (3) c (4) d
- ⑤ (1) a (2) c (3) d (4) b
- ⑥ (1) b (2) d (3) a (4) c
- ⑦ (1) c (2) b (3) d (4) a

問6 下線部②「そういう矛盾」とはどういうことか。次の形式にしたがって、()内を40字以内で記しなさい。ただし、「主観的」、「客観的」の2語を必ず入れること。

心の問題を身体的な説明によって行おうとすると、()ということ。

問7 本文の内容を150字以内で要約しなさい(句読点を含む)。

2 以下の資料（図1～3、表1～2）を見て、後の問いに答えなさい。

なお、資料中の「母子世帯」「父子世帯」「母（父）子世帯（他の世帯員がいる世帯を含む）」の意味は、次の通りとする。

母子世帯：未婚、死別又は離別の女親と、その未婚の20歳未満の子供のみから成る一般世帯のこと。

父子世帯：未婚、死別又は離別の男親と、その未婚の20歳未満の子供のみから成る一般世帯のこと。

母（父）子世帯（他の世帯員がいる世帯を含む）：「母子世帯」及び「父子世帯」に、未婚、死別又は離別の女（男）親と、その未婚の20歳未満の子供及び他の世帯員（20歳以上の子供を除く。）から成る一般世帯を含めた世帯のこと。

<図表>

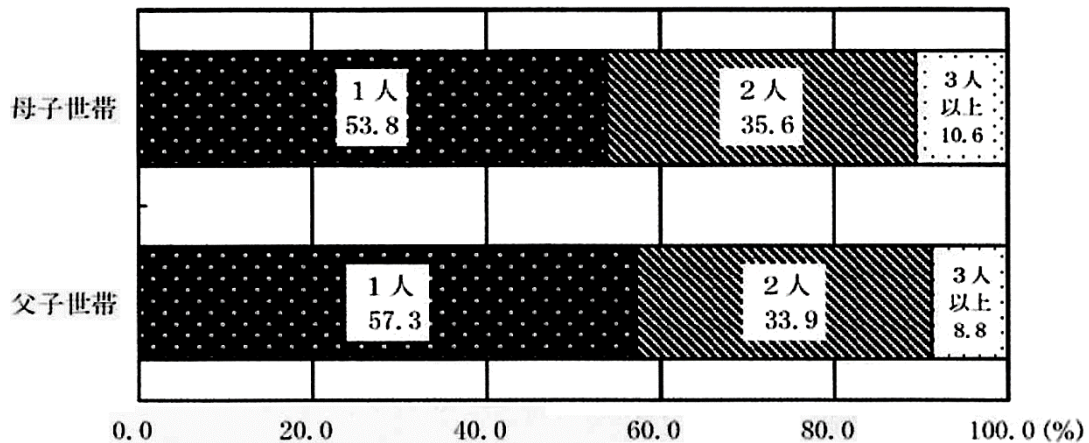


図1 母子世帯、父子世帯に占める子どもの数別割合（全国：平成27年）

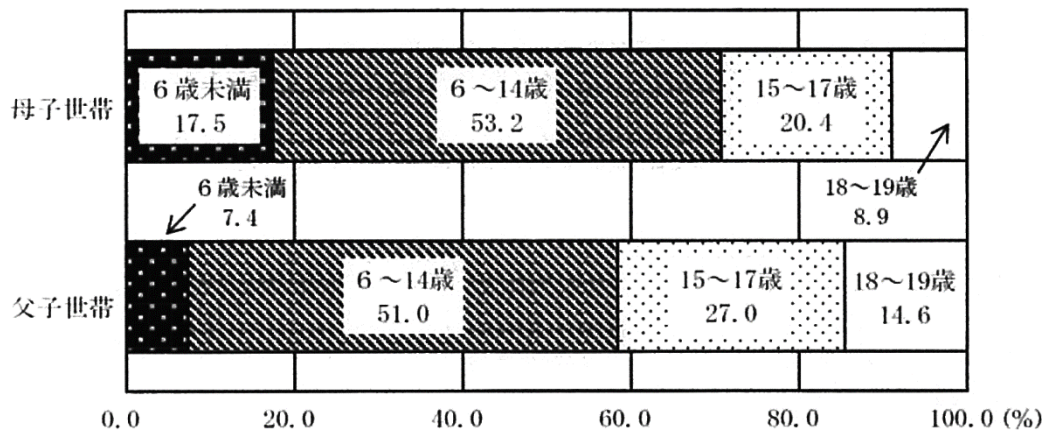


図2 母子世帯、父子世帯に占める最年少の子どもの年齢別割合（全国：平成27年）

表1 母子世帯、父子世帯に占める子どもの数別割合及び最年少の子どもの年齢別割合
(全国：平成27年)

子供の数, 最年少の子供の年齢	実数(世帯)		割合(%)	
	母子世帯	父子世帯	母子世帯	父子世帯
総数	754,724	84,003	100.0	100.0
(子供の数)				
1人	406,006	48,125	53.8	57.3
2人	268,807	28,504	35.6	33.9
3人以上	79,911	7,374	10.6	8.8
(最年少の子供の年齢)				
6歳未満	132,108	6,175	17.5	7.4
6～14歳	401,481	42,880	53.2	51.0
15～17歳	153,784	22,679	20.4	27.0
18～19歳	67,351	12,269	8.9	14.6

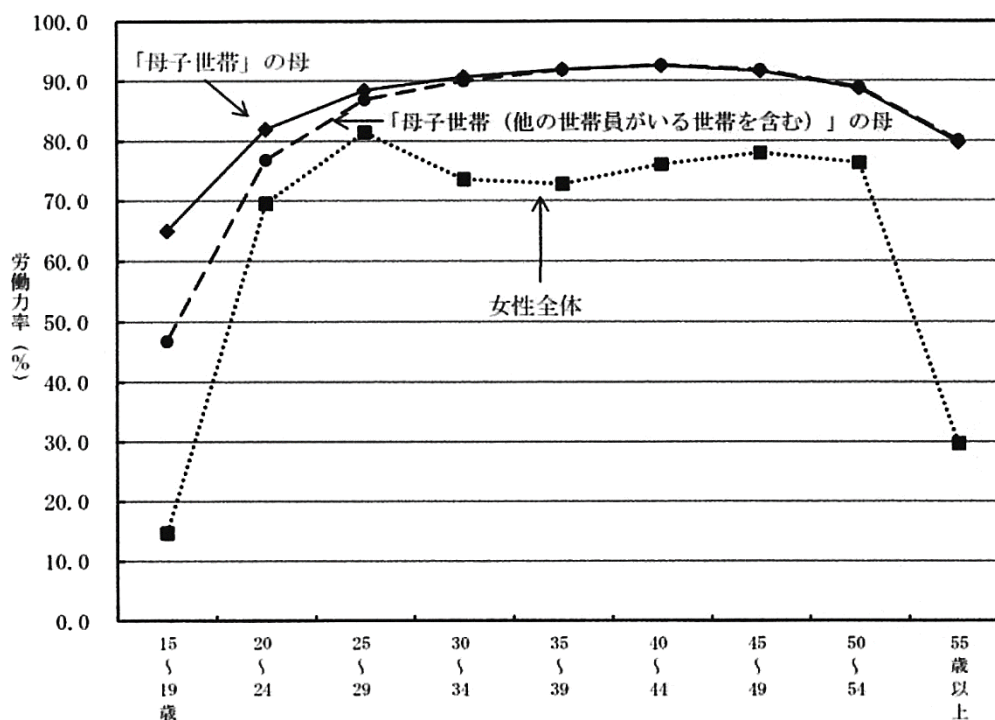


図3 母子世帯の母及び女性全体の年齢(5歳階級)別労働力率(全国：平成27年)

表2 母子世帯の母及び女性全体の年齢（5歳階級）、労働力状態別人口及び労働力率
（全国：平成27年）

労働力状態	実数（人）									
	総数	15～19歳	20～24	25～29	30～34	35～39	40～44	45～49	50～54	55歳以上
母子世帯の母										
総数 1)	754,724	550	12,232	44,905	96,116	160,883	222,129	147,195	55,123	15,591
労働力人口	641,929	289	8,402	35,364	80,268	138,093	193,989	127,535	46,270	11,719
うち就業者	602,969	215	7,190	32,178	74,671	130,075	183,802	120,496	43,440	10,902
非労働力人口	62,981	156	1,858	4,599	8,242	12,063	15,550	11,653	5,874	2,986
労働力率（%）	91.1	64.9	81.9	88.5	90.7	92.0	92.6	91.6	88.7	79.7
母子世帯（他の世帯員がいる世帯を含む）の母										
総数 1)	1,062,702	2,911	24,505	73,312	146,049	230,586	302,845	193,452	70,018	19,024
労働力人口	913,018	1,194	16,782	58,673	123,703	201,076	267,913	169,739	59,467	14,471
うち就業者	859,043	941	14,413	53,585	115,460	189,819	254,406	160,817	56,058	13,544
非労働力人口	93,946	1,356	5,081	8,836	13,717	17,703	21,213	15,066	7,364	3,610
労働力率（%）	90.7	46.8	76.8	86.9	90.0	91.9	92.7	91.8	89.0	80.0
女性全体										
労働力率（%）	50.0	14.7	69.5	81.4	73.5	72.7	76.0	77.9	76.2	29.7

1) 労働力状態「不詳」を含む。

出典：

総務省統計局 平成27年国勢調査 世帯構造等基本集計結果（2020年2月19日閲覧）

<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2015/kekka/kihon3/pdf/gaiyou.pdf>

問 以下の1～7の文章を読み、資料（図表）から読み取れる結果として、最も適切なものを①～③の中から一つ選びなさい。

1. 父子世帯と母子世帯を最年少の子ども年齢別に比べると、父子世帯の中で6歳未満および6歳から14歳に相当する年齢層の子どものいる割合は、母子世帯で同じ年齢層の子どものいる割合に比べて、わずかに高い。
 - ① 資料から読み取れる内容として正確である
 - ② 資料から読み取れる内容として誤りである
 - ③ この資料だけでは正誤を判断できない

2. 母子世帯と父子世帯の実数を比較したとき、3人以上の子どもをかかえる母子世帯の数の方が、1人または2人の子どもをかかえる父子世帯の数よりも多い。
 - ① 資料から読み取れる内容として正確である
 - ② 資料から読み取れる内容として誤りである
 - ③ この資料だけでは正誤を判断できない

3. 父子世帯がかかえる子どもの年齢の平均値は、母子世帯に比べると、少し高い傾向にある。
- ① 資料から読み取れる内容として正確である
 - ② 資料から読み取れる内容として誤りである
 - ③ この資料だけでは正誤を判断できない
4. 父子世帯と母子世帯で最年少の子どもの割合を比べてみると、18～19歳で父子世帯の方が母子世帯より割合が高いのは、母親に比べて父親の経済力が高いためである。
- ① 資料から読み取れる内容として正確である
 - ② 資料から読み取れる内容として誤りである
 - ③ この資料だけでは正誤を判断できない
5. 「母子世帯の母」と「母子世帯（他の世帯員がいる世帯を含む）の母親」と「女性全体」の労働力率を年齢ごとに比較すると、最も高い労働力率を示す年齢層は、3群で同一である。
- ① 資料から読み取れる内容として正確である
 - ② 資料から読み取れる内容として誤りである
 - ③ この資料だけでは正誤を判断できない
6. 55歳以上を除けば、いずれの年齢においても、男女ともに非労働力人口より労働力人口の方が多い。
- ① 資料から読み取れる内容として正確である
 - ② 資料から読み取れる内容として誤りである
 - ③ この資料だけでは正誤を判断できない
7. 母親の労働力率を年齢（5歳階級）別にみると、30歳未満の各年齢階級では、「母子世帯」の母親が「母子世帯（他の世帯員がいる世帯を含む）」の母親を1.6%以上上回っており、15～19歳では両者の差が18.1%に広がっている。
- ① 資料から読み取れる内容として正確である
 - ② 資料から読み取れる内容として誤りである
 - ③ この資料だけでは正誤を判断できない

1

出題の意図・ねらい

問6 文章の論理構造を捉え、著者の主張を把握することができる。

問7 文章を論理的に書き、適切にまとめることができる。

解答（例）

問1 ②

問2 ③

問3 ①

問4 ②

問5 ②

問6 心の問題を身体的な説明によって行おうとすると、(体験の客観的説明に一見近づくが、心の主観的体験からはむしろ遠ざかってしまう)ということ。(37字)

問7 種の限界を超えてヒトがコウモリの心の体験を想像することは、その際ヒトの記憶の意義を適切に扱うことができないため、妥当性を欠いたものにならざるを得ない。そこから示唆されるように、心の主観的な体験を、心が身体と連絡しているという事実を抜きに、身体的な過程のみに着目して客観的に記述することはできない。(148字)

2

解答（例）と解説

1. ②

表2を読み取る。母子世帯における6歳未満+6～14歳の子どもの割合は、 $17.5+53.2=70.7\%$ である。これに対して父子世帯における同比率は、 $7.4+51.0=58.4\%$ である。母子世帯の方が割合が高い。

2. ①

表1を読み取る。母子家庭設問は子供の絶対数を尋ねているので、図1の割合で即断しないことが必要である。3人以上の子どもがいる母子世帯は79,911世帯であるのに対して、1人の子どもがいる父子世帯は48,125世帯、2人の子どもがいる父子世帯は28,504世帯である。つまり、1人または2人の子どもがいる父子世帯の数は76,629世帯となり、3人以上の子どもがいる母子世帯数に及ばない。

3. ③

提示されている図表の中に、子どもの年齢の平均値が示されているものはない。

4. ③

提示されている図表の中に、父親の経済力を示すものがない。

5. ②

図3を読み取る。「母子世帯の母」「母子世帯（他の世帯員がいる世帯を含む）の母」の2群は、いずれも40～44歳でもっとも高い労働力率を示している。しかし、「女性全体」で最も高い労働力率を示しているのは、25～29歳である。

6. ③

提示されている図表の中に、男性の労働力率を示したものがない。

7. ①

表2および図3を読み取る。30歳未満でもっとも両群の差の小さいのは25～29歳で、その差は1.6ポイントである。